

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 15 日現在

機関番号：31302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520905

研究課題名(和文) 16世紀前半の聖地巡礼記に見る十字軍観・ムスリム観・イスラーム観の変容

研究課題名(英文) The Pilgrims' View on Islam, Muslims and Crusades and Its Changes in the First Half of the 16th Century

研究代表者

櫻井 康人 (Yasuto, Sakurai)

東北学院大学・文学部・教授

研究者番号：60382652

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：マムルーク朝末期からオスマン帝国初期にかけての聖地周辺域の無秩序状態は、聖地巡礼者たちの中に反ムスリム感情および「十字軍」の希望を醸造させた。しかし、1530年代に入りオスマン帝国による聖地周辺域支配が安定化傾向を見せるに及んで、彼らは護衛者としての「トルコ人」に感謝の意を表するようになった。ただし、それは彼らの中から反「トルコ人」感情を払拭するには至らず、反キリスト教としてのイスラーム信仰における主役も「トルコ人」となった。経験を通じて反「トルコ人」感情も醸造させた巡礼者たちは、過去の「十字軍」ではなく、その感情を接着剤として聖地回復の希望＝聖地の解放と「十字軍」の希望を接合させていった。

研究成果の概要(英文)：In the last years of the Mamuluk Sultanate and the early days of the Ottoman Empire, many pilgrims had the feeling of anti-Muslims and the hope for the crusades under the condition of disorder. It is true that the control of the Ottoman Empire over the Holy Land gradually became stable after 1530's, so that the pilgrims came to show their gratitude for the Turks as the guards. But, the pilgrims had strengthened their hostile toward the Turks through their experiences in the Holy Land. As a result, the hope for the recovery of the Holy Land and the crusades against the Turks fused in the mind of the pilgrims.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学

キーワード：ヨーロッパ中世史

1. 研究開始当初の背景

啓蒙主義時代まで、十字軍とは中世期の現象であり、その終焉は13世紀であるとの見方が一般的であった。しかし、植民主義時代に十字軍史料の編纂作業が本格化していく中で、14世紀以降の十字軍に関する多くの史料が明るみに出されることとなった。そして、メモワール(聖地回復論覚書)などの史料に基づき、14世紀以降にも十字軍がその生命力を保ち続けたことをJ・ルルが論ずると、後期十字軍(14世紀以降の十字軍)は大きな論点の一つとなった。F・ハイデルベルガーやL・ティールは教皇関連史料からル・ルルの説を補強したが、後期十字軍という現象の定説化は1970年代以降における多元主義的研究の登場を待たねばならなかった。Jノライリー=スミスを主導とする多元主義的十字軍観を一言で表現すると、教皇中心主義となる。つまり、教皇が教会の敵に戦う者に対して、贖罪という価値を付加したものが十字軍となる。従って、教皇勅令さえ発令されれば、十字軍が存在する、という解釈が可能となるのである。これを補強する形で、E・シペリーによる十字軍批判研究は、13世紀以降においてもヨーロッパ人の心性として十字軍熱が主流であったことを示し、F・カルディーニ、B・ケダル、T・マストナックなどによるミッション研究は、ミッション活動と十字軍精神との結びつきを確認した。さらに、14世紀前半に起こった民衆十字軍運動に着目したS・シェインは、聖地国家陥落後もヨーロッパ世界では集合心性として聖地回復熱が存在していたと結論づけた。このような研究成果により、現在においては後期十字軍の存在自体は定説の地位を得ていると言ってもよい。

ただし、集合心性としての十字軍熱ということになると、一つの大きな問題が残されたままである。聖地巡礼の問題である。1333年に聖所の一部の管理権がフランチェスコ会に委譲されて以降、聖地巡礼を否定したルター主義の登場や、オスマン帝国による聖地周辺域の支配およびヨーロッパ侵入が現実のものとなる16世紀半ばまでの期間は、一般に「聖地巡礼の黄金期」と呼ばれている。かつて13世紀末に十字軍の終焉を見た研究者たちは、聖地巡礼熱の高揚もその一因として考えたが、ル・ルルやシェインなどの後期十字軍の研究者たちも、巡礼熱が十字軍の阻害要素であったという見解を提示している。もしそうであったならば、同じ時期に一方で十字軍熱が存続し、もう一方で「聖地巡礼の黄金期」を迎えた、という矛盾をいかに解釈すべきなのであろうか。この問題について見解を提示するのは、A・アティアとU・ガンツ=プレットラーのみであるが、彼らは一部の聖地巡礼記のみに依拠した上で、概して聖地巡礼者たちは当方世界での経験の中で十字軍熱をさらに熟成させ、結果として十字軍のプロパガンディストとしてヨーロッパで

の十字軍熱をさらに強めたとするのである。

以上のような研究動向を受けて、研究代表者は聖地巡礼記に着目して、その網羅的な分析からも後期十字軍について展開していくことが、後期十字軍像の正確な理解に繋がると考え、14世紀以降の聖地巡礼記の分析を行ってきたが、15世紀までの段階における考察の結果、以下のことが明らかとされた。14世紀ではマムルーク朝のスルタンによる聖地巡礼路の管理のおかげで円滑な聖地巡礼が可能となったという現実が、ムスリムに対する敵意を軽減させる作用を持ったが、15世紀になると安全に「麻痺」した巡礼者たちの中にムスリムに対する敵意が表面化したこと、およびオスマン帝国のパルカン半島進出という状況の中で巡礼者たちが「十字軍」という用語を用い始めたこと、すなわち15世紀後半における「十字軍」は聖地回復ではなく対オスマン帝国を意味したこと、である。当然のことながら、次に明らかにすべきはこのような傾向が16世紀にどのように変容したのか、ということであり、このことが本研究の背景となっている。

2. 研究の目的

研究代表者は、これまでに十字軍の全体像を理解するための一環として、いわゆる「後期十字軍」(14世紀以降の十字軍)の実態を解明するために、15世紀までの聖地巡礼記に着目して研究を行ってきた。本研究では、これまでの成果をさらに深化・発展させるために、16世紀前半に作成された聖地巡礼記から十字軍観およびイスラーム観を探る。具体的には、宗教改革運動・オスマン帝国による聖地周辺域の支配およびヨーロッパ侵入の激化により、「聖地巡礼の黄金期」の終焉とされる当該時期において、十字軍観・イスラーム観に変化が見られたのか否か、見られたとすればどのような変化であったのかを検討することが、本研究の目的となる。

3. 研究の方法

本研究で対象となる16世紀前半に作成された旅行記の類は、全部で約150作品現存している。まずは、内容および人称に基づいて網羅的に分析した上で、旅行記を6つの系統(□メモワール、□旅行書、□創作、□聖地巡礼記、□巡礼ガイド、その他(版画など))に分類し、聖地巡礼記およびその補助的史料として巡礼ガイドに検討対象を限定する。それぞれの作品について、作者の出身地・出自・旅程などの基本情報を整理した上で、各作品から十字軍観(過去の十字軍に対する記憶・追憶的記述、および経験としての聖地の現状に対する感情)やイスラーム観(クルアーンやムハンマドに関する情報をどのように伝えようとしているのか、および経験を通じてのムスリムに対する感情の変化の有無)に関する情報を

抽出する。このような情報を記す者、および記さない者との間にどのような地域的・社会的・時代的傾向が看取できるのか、それらが意味することを巡礼記全体、ひいてはヨーロッパ社会全体の文脈で可能な限り問い直す、という方法である。

4. 研究成果

史料分析の結果として、以下のことが明らかとされた。

マムルーク朝末期からオスマン帝国初期にかけての聖地周辺域の無秩序状態は、聖地巡礼者たちの中に反ムスリム感情および「十字軍」の希望を醸造させた。しかし、1530年代に入りオスマン帝国による聖地周辺域支配が安定化傾向を見せるに及んで、彼らは護衛者としての「トルコ人」に感謝の意を表すようになった。ただし、それは彼らの中から反「トルコ人」感情を払拭するには至らず、反キリスト教としてのイスラーム信仰における主役も「トルコ人」となった。経験を通じて反「トルコ人」感情も醸造させた巡礼者たちは、過去の「十字軍」ではなく、その感情を接着剤として聖地回復の希望＝聖地の解放と「十字軍」の希望を接合させていったのである。

ただし、注意せねばならないのが、ナショナリティーによる温度差の存在である。上記のような傾向が見られるのは、概してフランス人の間においてである。一方で、主としてドイツ人たちの間においては、「十字軍」とはあくまでも過去の現象に過ぎず、それと聖地周辺域との現状は切り離されて考えられていたのである。このように、16世紀にはオスマン帝国と所属国家との関係が、聖地巡礼者たちの「十字軍」観に大きな影響を与えていたと言えるのである。

上記の通り、一般には16世紀前半までは「聖地巡礼記の黄金時代」と言われるが、当然のことながら16世紀後半以降に聖地巡礼者が現れなかったわけではない。本研究で得られた結論が、16世紀後半以降にも当てはまるのであろうか、あるいは何らかの変化が生じたのであろうか、変化が生じたとすればどのように変容したのか、そしてその変容の背景にはなにがあったのであろうか、これらについて考えていくことが今後の課題となることは言うまでもない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

・櫻井康人「1501～1530年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観 後期十字軍再考(6)」『ヨーロッパ文化史研究』14号、2013年3月、99～133頁。

・櫻井康人「「無料で運ぶわけではないし、

神の愛のために運ぶわけではない」 中世におけるヴェネツィア・ガレー巡礼船のパトロンたち」『史林』97巻1号、2014年1月、36～74頁。

・櫻井康人「1531年～1550年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観 後期十字軍再考(7)」『ヨーロッパ文化史研究』15号、2014年3月、73～97頁。

〔学会発表〕(計2件)

・櫻井康人「「無料で運ぶわけではないし、神の愛のために運ぶわけではない」 ヴェネツィア・ガレー巡礼船のパトロンたち」史学研究会例会 20.04.2013 於京都大学文学部新館第3講義室。

・櫻井康人「14世紀の聖地巡礼記に見る十字軍観・イスラーム観・ムスリム観」日本英文学会第85回大会シンポジウム第五部門「いま「十字軍」を問う 14世紀の史料・文学から読み解く十字軍の表象」25.5.2013 於東北大学川内キャンパス B棟 B201 教室。

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

櫻井康人(SAKURAI YASUTO)
東北学院大学・文学部・教授
研究者番号：60382652

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：